

絶滅種クニマスを発見

京都大学総合博物館

なかぼう てつじ
中坊 徹次 教授

クニマスはかつて秋田県の田沢湖のみに生息していた固有種で、絶滅したとされていた。2010年2月、中坊教授がクニマスの復元イラストをさかなクンに依頼し、その参考に山梨県の西湖から、近縁種のアサギマスとして取り寄せた9匹を中坊教授らが分析したところ、クニマスであることが判明した。



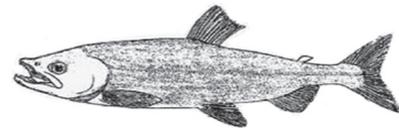
クニマスの発見

クニマスは元来、秋田県の田沢湖にしか生息していませんでした。でも1934年に田沢湖で飢饉が起こりましてね。田畑に水を入れて食料の生産性を高めたり、電力の供給を増やしたりするために、泣く泣く田沢湖に玉川の酸性水を入れたんです。それがきっかけでクニマスは滅んでしまった。戦前に田沢湖でクニマス漁師だった三浦久兵衛さん、この人がクニマスが絶滅する前の他の湖への移植記録をもとに、移植先で生存していないか調べ始めたんです。この思いに共感した田沢湖観光協会が懸賞金をかけて「クニマス探しキャンペーン」を行いました。

そのときクニマス鑑定委員会ができて、持ち込まれた魚を調べたんですが、すべてヒメマスという答えでした。その鑑定委員の一人、杉山秀樹という人が戦前のクニマスの文献を調べて『クニマス百科』という一冊の本にしました。その本を読

んで、クニマスに興味を持ったのが私なんです。こうやって戦前の三浦久兵衛、『クニマス百科』の杉山秀樹、そして私とパトンがつながっているわけですね。これら3人の周囲で、鑑定委員会の人たち、テレビ局に勤めている私の教え子が撮影班として協力してくれたのです。

さかなクンも関わってくれた人の一人です。春のヒメマスは銀色をしているんですが、さかなクンが持ってきてくれた魚は黒かったんです。そこから産卵期や体の特徴を調べてクニマスだと分かったんですが、体色が黒くない時期のクニマスというのものはずなんです。もし見つかったのがその時期のクニマスだったら、クニマスだと特定することができなかつたでしょう。発見したのは奇跡だったと思います。そういった偶然と、周囲の人の協力。その結果が今回の発見だと思っています。



※左は発見のきっかけとなったさかなクンによるクニマスのイラスト。田沢湖で絶滅する5年ほど前に、放流用としてクニマスの卵が西湖に運ばれた記録がある。

～プロフィール～

1949年11月8日京都府に生まれる。1973年3月に京都大学農学部水産学科を卒業した後、京都大学農学部水産学科助教授を経て1997年4月より京都大学総合博物館教授。著書に『日本産魚類検索』など。専門は魚類学。

ちなみに好きな魚はフナで、理由は流線の形と泳ぐ姿が美しいからだそう。「魚は見てかっこいい、食べておいしい、そして研究対象である」と語る。



▲西湖で発見されたクニマス



研究内容

私は魚類学の中でも特に、魚類系統分類学の研究をしています。いろいろな魚がどのように進化してきたかを体系的に表すという研究ですね。学名のない、いわゆる新種を扱う学問でもあります。魚には本当によく似た種がいて、たとえば漁師がまとめてメバルと呼んでいた魚が、実は独立した3種だったことがありました。そういった似た魚を、見た目だけでなく生態やDNAの調査を通して別種だと説明する、そういう学問です。

また、1955年に私の先生の先生が作られた『魚類の形態と検索』という本があるんですが、それに感銘を受けて、「これに絵をつけたらどうなるんだろう」と思い、『日本産魚類検索』という図から検索できる本を作りました。文章だと用語を知っていないとだめですが、図だとわかりやすいですから。これは仲間と9年くらいかけて作りました。



きっかけ

私が魚類学の道に進んだのは、単に魚が好きだからです。子どもの時に川が近くにあって、よく淡水魚と遊んでいたんですよ。それで京都大学の農学部水産学科に入ったんですが、そこで初めて海の魚に触れて、こっちの方が面白いなと思って。それからは、主に海の魚の研究を続けています。

他には、昔からものごとを調べて理解するのが好きでした。いろいろ調べると、その背景が見えてくるんですよ。そういう発見の楽しさは、調べてみないとわからない。調べて、発見して、楽しさを知ることが学問の原点だと思います。

私は最初、「絶対に研究者になろう」とは思っていませんでした。でも夏目漱石の弟子で物理学者の寺田寅彦の著書に感銘を受けて、こんな柔軟な思考を持った研究者になりたいと思うようになりました。



学生時代

私が学生のころはちょうど大学紛争で半年間授業がまったくなかったので、友達と遊ぶ時間がたくさんありました。経済学部や法学部、理学部の人々が周りにたくさんいて、そういった人といろんな本を読んで夜に議論していました。あれはものすごい肥やしになりましたね。そういった経験をベースにして3回生の時に舞鶴に行って、その時初めて海の魚に接したり自分で魚を釣ったりしました。また院生の先輩に本を借りて一生懸命勉強しました。水産研究所の調査に参加したこともありました。私達の研究室のモットーは、「まず外へ出て魚を見ろ」でした。そこでものすごい数の魚を見ましたね。また、今の学生には教授からテーマをもらって論文を書く人も多いですが、私は自分でテーマを決めて学位論文を書きました。そういった自主性は大切だと思いますね。



研究者として

若い時、特に20歳～27歳くらいはとても大事ですね。そこで研究者としての一生が決まってしまうと私は思っています。そこでいかにいろいろなものを見て摂取できるか、いかに頭を回らせるか。30歳以降からはプロの研究者にはなれないと思います。いつ花開くかはさまざまですが、20代半ばの下地はすごく大事だと思います。私は学部生時代からよく外に出て、いろんな調査に参加しました。3回生の終わりごろからプロの研究者を意識していましたね。ただ、どうなるかは予測がつかないし、こんな職業に就けるとは夢にも思いませんでした。でもこの道で食っていけたらと思ってひたすら研究をやっていました。



今後の目標

今、『魚類の進化』という、化石も生きている魚もすべて含めた大きな本を書いています。その執筆がまだ残っているので、なんとかやりきりたいですね。あとはダーウィンの『種の起源』に関する本を書いてみたいと思っています。私が大学3回生のときに、この本の輪読をしていたんですよ。自然選択がどうのこうのとか。若い時に輪読したものは結構頭に残りますね。そのダーウィンに対する興味は今でもありまして。私は全学共通科目で『博物誌学II』を担当しているんですが、ダーウィンがどうして『種の起源』を書いたのか、というのが講義の主なテーマなんです。それをなんとか極めたいと思っています。



京大生にひとこと

最近は就職や進学で悩む学生がいますが、進路というのは自分が絶対行きたいと思っていけるものではないんですよ。台風の進路と一緒に、幅を持って進みますし、そのときの環境条件、風向きで変わっていきます。人生もそれと同じだと思います。強い台風はある程度進路を保っていけますから、自助努力も必要でしょうね。丸山元副学長が、「最近の学生は『自学自習』の風潮がなくなりましたね」とよく言っていました。「自学自習」は京大生の基本だと思います。ぜひこの伝統を守ってほしいですね。

———ありがとうございました。